

2章 「支える」

2章では、主体的に遊ぶ子どもたちを「支える」ことに焦点を当てています。保育者が、子どもの主体的な園生活を支えることで、子どもは能動性を存分に発揮して、「そうだ！」と遊びの発想をします。そして、「やってみよう」と、発想を実現するために試行錯誤したり、「もっと！」と、探究を深めたりして遊びます。このような「科学する心」の育ちを支えるためには、子どもたちの身近な環境作りが大切です。安全で安心して遊べる自由感があり、自ら関わり使いこなせる操作性や可塑性のある環境や教材などを、子どもの視点に立って見直し工夫することは、遊びの展開の大きな支えとなります。こうした環境の中で、子どもをよく観て興味や好奇心、欲求などを理解し、寄り添う保育者の関わりもまた大きな支えです。

「支える」のプロセス

＜園内研修や保育レポートの参考に＞

- ① 日々の遊びの基盤となるよう、**安全で安心して遊べる自由感のある環境**づくりや整備をする。
↓
- ② 子どもたちが自ら関わり**使いこなせる操作性や、関わることの効果を感じられる可塑性のある環境**や教材を設定する。
↓
- ③ 子どもたちの**興味や好奇心、欲求を理解して寄り添う**（温かな目線・思いの共有）。
↓
- ④ 子どもの**姿や言葉に応える**（同じ目線・認めや共感）。
↓
- ⑤ 子どもの**思考の意識化を図る**（疑問や確認になる言葉かけ・思考の表現を引き出す・可視化する）。
↓
- ⑥ 納得し、満足するまで遊べる**場や時間を保障**する。

※ 上記の実践の具体例（ご紹介している園は本事例集の掲載園です）

- ①②： 金城学院幼稚園では、子どもが安心して自由に関われる操作性や、関わることの効果を感じられる可塑性のある園庭作りをしました。
- ③④： 西幼稚園では、子どもが生き物への興味を深め、親しみをもって関われるように、教材研究・遊びの見取り・幼児理解を深める園内研修を積み重ねて、保育の工夫をしています。
- ⑤： もいわ幼稚園では、子どもが探究する遊びの場として作った「研究所」をし、さらに体験が深まるように探究に必要なモノを持ち込んだり、表現したりできるような環境を整えています。
- ⑥： 鶴舞こども園では、子どもたちが発想して、目指す『いい』を追究し、納得いくまで遊び込める保育を工夫しています。



「どうしてうまく流れないんだろうね？」

実践3：温泉に水を流そう（創造的なひらめきを支える）

(P.10)

「砂場の温泉に水を流す」という共通の目的をもった5歳児が、より面白くなるように、困難に出合っても試行錯誤して乗り越え、新たな課題を見つけたり友達と協力したりして遊びを進める姿を、独自の視点で捉えた事例です。保育者は、子どもたちの遊びの中での創造的なひらめき＝「いい」との出合いに注目し、「いい」が遊びの中で変化していく姿を、「いいをかたちづくる過程」として、詳細に理解しています。とことん子どもの視点に立ってこの過程を理解した上で、さらに、保育者の関わりや環境の工夫につなげていることが読み取れます。

実践4：「シャボン玉研究所」（心の動きを支える）

(P.12)

シャボン玉遊びを自分たちで展開しているものの、新たな発想が生まれず、興味とは裏腹に、遊びが停滞する様子が見えてきました。そこで、本園の大切にしている「ほんまもの」の体験をする機会（高等学校の理科教諭による「シャボン玉」実験を見る）を設けました。「シャボン玉研究所」につながる“シャボン玉実験”を実施してくださったことで、子どもたちには新たな発想や疑問が生まれ、探究へと展開しました。保育者は、子どもたちの挑戦していることや、発見していることを丁寧に見取り、支えています。



「シャボン玉の膜、2つになった」「膜、移せたね」

実践5：“くろいの”って面白い！（探索行動を支える）

(P.14)

1, 2歳児が繰り返し行っている行為の中から、自分が関わることで、興味の対象が変化する様子に面白さを感じていることが読み取れます。そこには、思うようになった面白さと、思うようにならない不思議さを感じて繰り返す姿があります。この事例の2歳児は、影に気づき、探索行動をしながら影が見えたり消えたりすることに気づいたり、確かめたりするようになります。保育者に「見て見て」と伝えるまでに、「できるかな？こうかな？」と、2歳児なりの予想や試行錯誤が繰り返され、太陽の日差しと自分の体と影とが関係していることを感じて、影の仕組みを「発見できた！」という姿には、喜びや有能感が表われています。



「“くろいの” ある」



「あれ、出てこないな」

実践6：水ってすごい！（試行錯誤を支える）

(P.16)

保育室でビー玉転がしに使った経験から、砂場でも樋を使って遊ぶようになる3歳児。水を溜めたいのですが、樋がずれたり、つなぎ目が合わなかったりと、水を流すために試行錯誤します。長い樋を扱って“水を流す遊びをする中で”、「そうめん流し」をイメージすると、保育者が用意した毛糸に気づき、早速、そうめんに見立てて使います。ところが、そうめんのように流れません。試行錯誤することで、3歳児なりに、仲間と一緒に考え合ったり協力し合ったりする姿が見られるようになります。水や砂、毛糸などの素材や、モノの傾きなどに感じたり気づいたりする姿に、「科学する心」を読み取ることができます。

実践7：お米作りから広がる子どもの世界（探究を支える）

(P.18)

5歳児の米作りに関する一年間の活動に注目し、長期にわたる活動をやり遂げる過程から、子どもたちの『科学する心』の育ちにつながる体験を明らかにした事例です。米作りは、子どもの主体性を生かした保育者の援助や環境構成の工夫により、多様で豊かな体験につながりました。これらの多様な活動には、地域の施設や専門家、保護者などとの連携が大きな支えとなっています。特に、地域の博物館で「古代米」と出会い、興味をもった子どもたちは、自分たちの米と古代米との様々な違いに気づき、益々興味を深めていきます。さらに、竪穴式住居など古代の生活への興味を広げていきました。



「古代米の方が、モミの中がうっすら黒い」

園内研修としての「支える」をご紹介！

園には、子どもへの支援中心の保育者の他にも、管理職、中間管理職、事務や給食など専門の職員がそれぞれ立場で子どもに関わり、健やかな成長や発達を支えています。その一人一人の保育者や職員の専門性や感性、子どもとの関係性を活かす園内の連携や協働的な体制が大切です。

- ・ **園全体** …… 子どもや保育者の実態を踏まえて、共通の目的や視点、課題をもって情報交換ができるよう、会議の持ち方や掲示物、資料などを工夫することで、保育・教育課程やカリキュラムの見直し、再編集につなげる。
- ・ **保育者間** …… 「子ども主体の保育になっているか」に、迷ったり戸惑ったりする場面について共有する機会を作る。子どもの思いに寄り添えているか？子どもの言動を受け止めているか？実態に添った環境作りができていないか？など、毎日の保育の中で課題に出合った時に、保育者間で考え合うことが乗り越えるポイント。例えば、教材や環境作り、清掃などの共同作業をしながら話し合うなど、日々の保育の中で、子どもや保育について話せる時間の捻出を工夫する。
- ・ **チーム作り** …… 同じクラスや同学年のチーム保育はもちろん、共通の目的や視点、課題をもって保育に取り組む保育者同士がチームになり、課題解決に向けて円滑に取り組めるようにする。
※立場の違う職員も、チームの一員となって子どもに向き合い、支える体制をつくる。